

# 満漢字清文啓蒙に於ける満洲語音韻の考察 (1)

池 上 二 良

An Inquiry into the Phonology of Manchu in  
the *Man-han-tzū Ch'ing-wèn-ch'i-mêng* (1)

Jirô Ikegami

§1 まづ、満洲語において口語と文語の区別を立てたい。口語とは口頭で使ふ言語であるが、ただ単一の言語体系を意味するものでなく、その言語を使ふ人々に共通的のもの、或いは地域的にまた社会的に異なるもの等種々の言語体系を含んでゐる。

文語とは文字で書く言語であり、口語とは多かれ少かれ異なるものである。しかし口語と文語とはそれぞれ独立に存在するのではなく、相互に影響を与へるものである。すなはち、文語へは必ず口語が反映するだらうし、また反面文語の口語への影響も当然おきて来る。満洲語においては、清初には無圈点満洲字で書かれた文語があつたが、間もなく有圈点満洲字が用ゐられる様になり、爾来この有圈点満洲字を以つて書かれる文語が存して来たのである。なほ新疆省の満洲人には満洲語をローマ字で書く運動が新たにおきたよしであるが<sup>(1)</sup> これも文語の一種とみることができる。満洲語文語は上述の様に一種ではないが、特に断らぬ限り満洲語文語といふ語は有圈点満洲字で書かれた満洲語文語を意味することにする。

満洲字（ただ満洲字と言へば通常有圈点満洲字を指す）の転写法については、従来の満洲語文典に見えてゐる諸方法は改良の余地があるが（たとへばいはゆる喉音文字について）、本稿では仮にそれらのうちのメレンドルフ式ローマ字転写法 (P.G. von Möllendorff: A Manchu grammar, with analysed texts, Shanghai 1892) に拠ることとする。

§2 満洲語口語も種々異つた言語体系を含んでゐるのであらうが、本稿で取扱ふ資料からは充分窺ふことはできない。ルードニェフは一九〇七年に愛琿と大黒河の間にあるオフォロ・トクソといふ村出身の若い満洲人の満洲語口語を調査したが<sup>(2)</sup> かれはこの口語を以下に述べる錫伯方言に比較してつぎの様に記してゐる。

わたくしの満洲語口語は書写満洲語に近いが、しかしそれと一致はしない。錫伯方言はわたくしのよりも書写満洲語に近い<sup>(3)</sup>

ルードニェフの調査したものが満洲語口語においてどんな位置を占めるかは、なほ考究せねばならない。

錫伯族の話す満洲語口語を錫伯方言と呼ぶことにする。ラートロフは一八六〇年代に新疆省伊犁地方の錫伯方言を調査してゐる。かれの報告する資料はなほ検討の余地があると思ふが<sup>(4)</sup> この錫伯方言についてつぎの様に記してゐる。

錫伯人の言語は完全に満洲文語に一致してゐる、そしてかれらの発音はなるほど正確に、満洲人が書く如くであるが、満洲人が話す如くではない。かくしてかれらは「gisun」（ことば）といふ単語を満洲語で書かれる如く言ふ、他方満洲人は「gisun」と書くが、しかし「dsisun」と発音する。かれらは従つて十五世紀にシナへ移住した満洲人の属したと同じ種族であるに違ひない。いまや教育のない満洲人はかれらの言語をすっかり忘れてしまつてただシナ語だけを解し、教育のある満洲人は満洲語を外国語の様に書物から習得するのに、一方満洲語は公の官庁語であるゆゑに、満洲人官

吏のすべての官庁には錫伯人が書記に任ぜられてゐる。さて、満洲人官吏の書記としてのかかる地位は非常に有利であるゆゑ、ほとんどすべての錫伯人が満洲文字を習得する<sup>(5)</sup>

錫伯方言が文語に近いといふことは、シナ化した満洲人が学習により習得した満洲語よりも錫伯人が母語とする純粋な満洲語として文語に近いといふ意味であるか、或は母語として保たれた満洲語口語のうちで特に錫伯方言が文語に近いといふことであるかは、なほ考究せねばならない。もし後者の意味であれば、そこには満洲語文語の起源の問題にも触れて来ることになる。

服部先生が昭和十年新疆省惠遠城出身の満洲人の青年について調査された口語は、おそらく一種の錫伯方言であらうと思ふ<sup>(6)</sup>

北京のシナ化した満洲人の満洲語（これを口語と認めるにはなほ考慮を要する）については、ザハーロフが十九世紀のおそろくなかば過ぎにその発音もしくは文語の音読を調査したが、つぎの様に述べてゐる。

まったく自分の母語を忘れてすっかりシナ化した北京の満洲人は、満洲語の学習の際、諸単語の音読と発音においてシナ語北方方言に順応させ、かつて以前のかねらの母語の文字及び単語の発音から多くの点で逸脱してゐる。しかしそのかつての発音は満洲字母に採用されたのであり、また生来自分の生得の言語で話してまったくはシナ化しない満洲人はその発音に従つてゐるのである<sup>(7)</sup>（以下略）

すなはち北京のシナ化した満洲人の満洲語の発音は、シナ語の音韻体系に基くものと言へるから、満洲語としては特殊な位置を占めるものである。あたかもこの満洲語全体が外国語に入った借用語の様であるとさへ言へる。

服部先生が昭和十五年吉林省吉林及び扶余において調査された満洲人の老人の満洲語は、やはりかうした性質のものと言へよう<sup>(8)</sup>

しかし、かうした特殊な満洲語においても、学習の際文語で書かれた書物のみによらず、口語を話す満洲人について習ふ場合には、なんらかの点で口語が反映して来るであらう。

§3 一般に満洲語の音韻を考察する際、口語の発音は最も重要な資料と言へるが、文語の音読法もやはり資料となる価値がある。すなはち後者は本質的には前者の音韻体系に基くからである。従つて口語の発音と文語の音読法とを明瞭には区別しない上述のザハーロフの記述も利用することにし、また服部先生の錫伯方言を調査されたとみられる資料のうちの十二字頭第一字頭の音読法は主要な資料として用ゐたい。

殊に過去の満洲語の音韻を考察する際には、外国語で使はれる文字によつて表音的に満洲語を写した文献も重要な資料となる。満洲語の諺文文献は満洲語を朝鮮字で転写したものであるが、その転写には或時代の或口語の発音が反映してゐるとみられる。（別の拙稿「満洲語の諺文文献に関する一報告」参照）

漢字を使つて満洲語を表音的に写した文献の一つに、雍正庚戌（雍正八年）の序を冠した舞格著の満漢字清文啓蒙 (Manju nikan hergen i cing wen ki meng bithe), 四巻がある。

そのうち満洲語音韻の考察の資料となる箇所は、まづ巻之一のうちの満洲十二字頭単字聯字指南 (Manju hergen i juwan juwe uju, emteli hergen, holboho hergen i jy nan) の条である。本書における単字、聯字の用語の意義は、前者は一音節を表す単音文字ないし単音文字の結合したものであり、後者は多音節を表す単音文字の結合である。本稿においても、この二語を以下に述べる切韻字の語と共に用ゐることとする。本条においては、十二字頭の各単字に対して表音のために漢字一字または二字（これは n, ng 以外の子音文字を末尾にもつ単字に対しての

場合) または反切を付すか、或は漢字一字及び反切を併せて付してゐる。また第二字頭以下の各字頭において例として挙げられたそれぞれ三つづつの聯字には、単字に当てた漢字をつなぎ合せて付してゐる。これらの表音的に用ゐられた漢字については以下に考察の資料とするが、なほ本条の各字頭にはその字頭の各単字に共通する発音上の点についての説明が記されてゐる。その説明には一般にはシナ語の韻書にみられる様な発音に関する用語が使はれてゐるが、これは価値のある資料とみられず、本稿ではその説明には一二を除いては触れない。

同じく卷之一のうちの切韻清字 (Manju acan mudan i hergen) の条も考察の資料となるものである。切韻清字は、一単字に y, w を頭にもつ一単字が後接してなつたものであるが、必ずしも二音節を表すとはみられない。かかる文字結合を本稿でも切韻字と呼ぶことにする。本条においてはこの切韻字に対して表音的に漢字一字または反切を付すか、或はそれらを併用し、さらにまた biyai の一例においては反切と漢字一字とを結合して示してゐる。これらの表音的に用ゐられた漢字については以下に取扱ふ。

同じく卷之一のうちの異施清字 (Mudan encu i manju hergen) の条では、上記の二条において漢字を使つて表された滿洲字の音とは異つて、おそらく口語ないしシナ化した特殊な滿洲語の発音を反映して字面を離れた音をもつ文語の音節および語に、この音を表す漢字が付してゐる。ただし各語には若干の例を除いて一般には意味を付記していない。本条に用ゐられてゐる漢字は原則として上記二条に用ゐられてゐるものであるが、若干の漢字は上記二条にはみられないものである。なほ本書のつぎの一例は字面通りの音をもつとみられ、例外をなしてゐる。

46才 gebge gabga 哥鋪哥 噶鋪噶 gēpugē gapuga よちよちと

この転写については以下に述べる。なほ本条の四十六丁表に、

以上諸字俱底改音不改字読念。以下諸字。亦有照此読念者。亦有按本字本音読念者。

学者不一。当各從其便。但滿洲語音清話。精奧無窮。難以尽述。惟頼高明成徳者。増删教正之。

とあり、本条のこれより前に示された形は滿洲語の一般的な形であるのに対して、これより後に示された形は口語の或方言の形ないしはシナ化した特殊な滿洲語の特別の形を反映するとみられる。

主としてこれらの条について、十八世紀前半の本書の示す滿洲語の音韻を考察して行きたい。

§4 本書において滿洲語の音韻がどんなものであるかを考察するには、まづそれを写す漢字音がどんなものかを知らねばならない。従つてその漢字音が重要な問題となるのである。本稿においてはその漢字音を現代の北京音(井上翠編著井上支那語中辞典 東京 昭和十六年)に拠る)に求めて転写したい。十八世紀前半の漢字音を現代北京音に求めることは当否が問題となるが、シナ語音韻史の大略より見て、また逆に他の資料より知られる滿洲語の音韻及び文字体系より見当をつけてみて、非常な誤謬は犯さないと考へられる。

漢字の用ゐ方については、異つた滿洲字で書かれる一定の諸単字に対して同一の漢字が当てられる場合があり、従つてその漢字による表音からみられる滿洲語の音韻は非常に特殊なものである。しかし、実際にはもつと純粹である滿洲語音韻が、その表し方が不正確なゆゑに、その様な特殊な様相を呈するのであると、必ずしも簡単に考へることはできない。これが上述のシナ化した特殊な滿洲語を示すかも知れぬからである。

卷之四の清字弁似 (Adališara manju hergen be ilgabuhangge) の条のうち、音同字辨似の項には、二つないし三つの単語(連語の場合が二例ある)をそれぞれ意味を付して対照したものが列挙してある。それらの単語(または連語)には音を表す漢字は付してないが、(一)同一単字と上述の如き滿洲字は異なるが本書で同一漢字を当てる単字とから成る単語を二つないし三つ対

照して挙げてある。また、(二)同一単字と本書でやはり同一漢字を当てるがなほ音の相違のあることを記してある単字とから成る二単語も対照して挙げてある。なほ「menggun 銀子。monggon 頂下咽喉。」の場合は、満洲字は異なるが同一漢字を当てる単字と満洲字も当てる漢字も異なる単字とから成る二単語を対照したものであり、また「jebile 撒袋。je bele 小米子。」の場合は、同一単字より成る単語と連語とを対照したものである。他にこれらと異なる一二の場合があるが、各例については以下の該当箇所に触れる。本書のこの項がどういふ意図をもつかについて、(二)の場合からは漢字によつて表音すると同一音となる単語を対照して挙げて区別したとも解せるが、従つて(一)の場合も同様であるとは必ずしも言へない。少くとも(一)の場合については満洲字は異なるが同じに発音される単語を区別したもので、すなはち同音異義語の説明であると言へぬ理由はないからである。(二)の場合もシナ化した特殊な満洲語においては同様なことが考へられる。すなはちこの項からも、異なる満洲字に当てた同一漢字が異なる音を表すとは必ずしも言へぬのである。

他に明かにその漢字音と異なる音であるといふ根拠を見出さぬ限り、原則として一応漢字音によつて転写する。それが最も事実を則して妥当と思はれる。

なほ本稿の漢字音の転写は、上に述べた点からも決して完全なものでなく仮のものであり、将来もつと精密な転写に置き換へられることはありうるのである。

## 子 音

### 閉 鎖 音

§5 十二字頭及び切韻清字の二条において、文語の k, k'; t; p 及び g, g'; d; b を頭にもつ単字、切韻字に対しては、概略的に言つて、それぞれ現代北京語で k', t', p' 及び k, t, p (Wade 式ローマ字に拠る。以下主としてこれに拠るが注音符號に拠る場合もあり、その場合は特に記す) を声母にもつ漢字が単独に当てられてゐるか、或はこれらの漢字が反切の上字に使つてある。ただし ki 及び gi を含む単字、切韻字と tū の単字に対しては異り、前者については §24 に、後者については §7 にそれぞれ述べる。

ka, k'a に当てられ、また kao, k'ao に対して反切上字に用ゐられる略の漢字は、その現代北京音が k'o<sup>3</sup>, k'a<sup>3</sup>, ch'ia<sup>3</sup> であるが、本書では ka, k'a の箇所では康呀切と併記してあるから現代北京音 k'a に相当する音を表すとみられる。

なほ te に当て、また tei, ten に対する反切上字に使ふ呷は、その現代北京音が不明であるが、te の箇所に偷哦切と併記してあり、現代北京音の t'e に相当する音を本書では表すものであらう。

to に当てた脱は、その現代北京音には t'o<sup>1,2,3</sup>, t'un<sup>4</sup>, yüeh<sup>4</sup> があるが、本書では現代北京語で通常音である t'o に相当する音を表すとみる。

pa に当て、また pai に対する反切上字に用ゐる叭は、その現代北京音が不明であるが、pa の箇所に潘窪切と併記してあり、現代北京音の p'a に相当する音を表すとみる。音韻逢源ではこの字が亥部十二、坎二、斗八、巽一にあり、現代北京音の p'a<sup>1</sup> に相当する音を表すとみられる<sup>(9)</sup>

pang に対する反切上字に使はれる叭は、その現代北京音が pa<sup>1</sup> であるが、上記の叭の誤字ともみられよう。

guwang に当てた漢字は先とあるが、kūwang, kuwang に匡, hūwang, huwang に慌を当ててある点からみて、gūwang に当てた光の誤字であるとみたい。

don, dun に当てた敦は、その現代北京音に tun<sup>1</sup>, tui<sup>1</sup>, t'un<sup>2</sup> の諸音があり、音韻逢源では、敦が卯部四，乾一，房四，巽一にあり，敦が未部八，乾一，房四，坤三にあるが，本書では逆にこのほかの場合の d に当てた現代北京音及び un にそれが唇音文字以外の子音文字と結合する際に当てた現代北京音から類推して現代北京音の tun に相当する音を表すとみる。

dong, dung に当てた咚は、その現代北京音が不明であるが、逆にこのほかの場合の d に当てた現代北京音及び唇音文字以外の子音文字と結合する際の ong, ung に当てた現代北京音から類推して、本書では現代北京音 tung に相当する音を表すとみる。

diye に当てた跌の現代北京音には tieh<sup>1</sup> のほかに tsai<sup>1</sup> があるが、これは通常の音ではない。

すなはち音節の頭における満洲字の k, k'; t; p g, g'; d; b に対して、漢字表記でそれぞれ k', k'; t'; p' k, k; t; p を当ててゐる。これらが如何なる音を表すかについては、本書からは軟口蓋音，歯音ないし歯茎音，唇音の閉鎖音の二つの系列であることが知られる。一応これらの漢字表記を k, t, p; g, d, b で転写することにする。

服部先生の調査された口語においてはつぎの様に音読される。

ka ko kū ke ki ku k'a k'o ga go gū ge gi gu g'a g'o  
q'a q'ò q'u k'ə k'ī k'u k'a k'ò ɕa ɕò ɕu ɕə ɕī ɕu ɕə ɕò

ta te ti to tu da de di do du  
t'a t'ə t'i t'ò tu ɖa ɖə ɖi ɖò du

pa pe pi po pu pū ba be bi bo bu bū  
p'a p'ə p'i p'ò p'u p'ò ɸa ɸə ɸi ɸò ɸu ɸò

なほこれに註して、

[ɕ] [ɖ] [ɸ] 等であらした子音は、密閉の始めからでなく途中から声の始まる所謂半有声音である。声の始まり方は満洲人に於て最もおそく、ダグール人に於て最も早い。

とある。声の始まり方は蒙古語新バルガ方言，ハルハ方言，ダグール方言と比較したのである。すなはち k, t, p は [q'], [k'], [k']; [t']; [p'] と，g, d, b は [ɕ], [ɖ], [ɸ]; [ɖ]; [ɸ] と読まれてゐる。k, g がおのおの三様に読まれる点は後の条で触れるが，k, t, p に対しては帯気無声音が現れ，g, d, b に対しては無気半有声音が現れてゐる。

一七八七年のアミオの満洲韃靼語文法には、満洲字にいきの出る (aspiré) k, t, p と軟かい (doux) k, t, p の二系列を認めてゐる。なほ軟かい p については特に「平らな調子の pa, pe, pi, po, pou, その平らな調子をわたくしは字母において軟カナ音調或は単に軟カイと表示しよう」とあ<sup>(40)</sup> また発音法を述べた箇所では k については、「k は非常にしばしばなかんづく語中と語尾で g の音をもつ。たとへば ake きみ (訳註 敬称の意味) と書かれ，ague と発音される。kourkou 動物と書かれ，kourgou と発音される等。」また t については、「t は全然いきの出ないとき，極めてしばしば語中と語尾で d の音をもつ。」と記されてゐる。この二系列の区別は帯気無声音と無気無声音の区別ともみられるが，錫伯方言の様な帯気無声音と無気半有声音の区別が同様に存したともみられる。

ルードニェフの調査した口語では、文語形の語頭の t-, k- (p- の例は見出されぬ) には、それぞれ τ (τ̇), ṫ; κ が対応するが，b-, d-, g- には б (б̇), ɸ, π; д, ɖ, τ; γ, ɸ, κ が対応してゐる。p- に対応する音が不明であるから b- の場合は措いて，d-, g- に対して τ, κ が現れるのは，実際の発音がさうであつたか，或は誤つた表記であるかは問題である。d- に τ の対

応する例はただ二例しかないのであるが、g- に К の対応する例は多く、そのなかに同一語に対して К と ґ の両方で表記した例もある。たとへば、

dehi: tīgě сорокъ (四十)

gala: кала, ґала рука (手)

服部先生調査の吉林省のシナ化した特殊な満洲語においては、半有声子音も現れるが、また有声子音も現れてゐる。

満洲語の閉鎖音の二系列は、音節の頭において、普通には、帯気無声音と無気半有声音とであるとみたい。

§6 服部先生の調査された口語には、既述の様に ka, ko, kū の k に対して [q'] が現れ、ke, ki, ku, k'a, k'o の k に対し [k'], [k'] が現れる。g に対しても k の場合と同じ条件で [g], [g], [g] が現れる。なお「満洲人の [k'a] [g'a] [k'o] [g'o] の破裂の生ずる位置は、夫々日本語の「カ」「ガ」「コ」「ゴ」のそれよりやや前。」と註がしてある。摩擦音の条に述べるが、h に対しても k の場合と同じ条件で [h]; [x], [x] が現れる。かかる前軟口蓋音、後軟口蓋音の区別のあることは満漢字清文啓蒙においては認められない。

ラートロフの調査した錫伯方言には、かれはこの区別を認めてゐない。すなはち、

(前略) 錫伯人はただ四つの後舌音 k, g, x, ɣ を認めるだけであるが、かれらはそれを文字の上で六つの異なる文字で示してゐる。(後略)<sup>(11)</sup>

と記してゐる。(ɣ については摩擦音の条参照。)

ルードニェフの口語調査にもこの音の区別は認められない。

シュミットは、教育のある北方満洲人はこの種の音の区別を認めてゐることを記してゐるが、上述のザハーロフの記述中喉音の条はこの音の区別を示してゐるとのかれのことばには従ひ難い<sup>(12)</sup>

しかるに乾隆十一年屯図の著一学三貫清文鑑 (Emu be tacifi ilan be hafukiyara manju gisun i buleku bithe)<sup>(13)</sup> の十二字頭第一字頭において、

ka 卡 ko 科 kū 枯 ga 葛。阿 go 鍋 gū 孤 ha 哈  
ho 豁 hū 呼

に喉中音と記し、

k'a 卡 k'o 科 ku 哭 g'a 葛。阿 g'o 鍋 gu 姑 h'a 哈  
h'o 豁 hu 呼

に口音と記してゐる。この喉中音、口音と記したのはこの音の区別を示したものとみられる。

また道光十六年の欽定清漢対音字式<sup>(14)</sup>の十二字頭の第一、第二、第四、第五、第十の各字頭において、k, g, h がそれぞれ a, o, ū; ai, oi, ūi; an, on, ūn; ang, ong, ūng; ao, oo, ūo と結合した単字に対しては重読と記し、k, g, h がそれぞれ u, ui, un, ung, uo と結合した単字、及び k', g', h' が a, o; ai, oi; an, on; ang, ong; ao, oo と結合した単字に対しては軽読と記してゐる。ただし三十一丁表の「hūng 軽読 宏・洪・鴻」とあるのは hung の誤字である。この重読、軽読とあるのは、やはり上述の音の区別を示したものとみられる。上掲書が喉中音、口音との確に区別したのに比べていささか明瞭を欠くが、この書の編纂目的から言つてこの方が実用的であり、一般に解り易いのであろうか。

なほ、シュミットは Manju nikan fe gisun be jofoho acabuha bithe の記述を紹介してゐる<sup>(15)</sup> この書は年代不明の満漢成語对待 (Manju nikan (i) fe gisun be jofoho acabuha bithe) 四巻を指すのであろうが、まだ見てゐない<sup>(16)</sup> 重訳を避けてシュミットのドイツ語訳を示す。

„Die zwei Silben 𑖇 (*kū*) und 𑖈 (*kā*) sind nach dem Tone der Aussprache (*mudan-i*

*urgen)* schwer (*užen*) und werden in der Kehle (*bil̄xa de*) hervorgebracht..... Werden sie nach dem Gaumen (*xexeri*) versetzt (*guribufi*) und deutlich ausgesprochen (*cira gisureci*), so entstehen  $\text{ᠬᠤ}$  (*ku*) und  $\text{ᠬᠠ}$  (*ka*)“ (Blatt 6 u. 7).

上述の音の区別はここに明瞭に記されてゐる。以上の三つの文献では、前軟口蓋音、後軟口蓋音の閉鎖音、摩擦音が単に音声としてのみでなく音韻として存在するとみてよいであらう。此の点から外国語音を写す外字 (*tulergi hergen*) *k'*, *g'*, *h'* の発生が説明できるのである。

満洲語の閉鎖音の二系列のそれぞれには、調音位置の相違による、前軟口蓋音、後軟口蓋音歯音ないし歯茎音、唇音の四種が音韻的に区別されてあるとみる。

§7 本書の十二字頭第一字頭の条には、単字 *tū* を *dū* と同じ字として両者に都の漢字を当ててゐる。都の現代北京音は *tou*<sup>1</sup>, *tu*<sup>1</sup> であり、声母は *t* である。*t* は上述の様に一般には満洲字 *d* に当てられてゐるのである。元来 *tū* の単字は、通常十二字頭にはない特別の単字であるが、ザハーロフはこの文字と音の関係を、

第二の字体の  $\text{ᠮ}$  で書かれた *t* (*t*) の文字は長い *y*, *ū* と結合する際に、蒙古語の例に倣つて、その文字には右側に点が無いと雖も、*d* (*d*) と読まれる。例 *tūmbi* думби, *butūn* будунь<sup>(17)</sup>

と説明してゐる。しかし点のある例、すなはち *dū* を含む語もあるらしく、ガーベレンツの満独辞典には *tūmbi*, *tūme efen*, *tūku*, *butūn* のほかに *dūrimbi* (楔を打つ、楔で割る) の語がある<sup>(18)</sup>

なほ本書では *tūmbi* が満洲外聯字の条にあるのは、この語を特殊なものとするのであらう。

*tūmbi* 都噓 *dumi* 拍打。又捶打

*tū* を含む単語の数は極少数であり、*tūmbi* とこの動詞の活用形、*tūku*, *butūn* ぐらいである。御製増訂清文鑑では、<sup>(19)</sup> これらの語に含まれる *tū* に付した漢字反切は  $\text{ᠮ}$  でなく、やはり都  $\text{ᠮ}$  である。

諺文文献のひとつである漢清文鑑の収録語中には *tūmbi*, *tūme efen*, *tūku*, *butūn* があるが、それらの *tū* に対する朝鮮字転写は *tu* でなくやはり *du* である。(別の拙稿「満洲語の諺文文献に関する一報告」第二項参照)

さらに古く満漢同文全書には、<sup>(20)</sup>

*budun* 庸懦 罈子 (卷三の四十四丁表)  
*dumbi* 敲 播 槌 (卷六の九丁表)  
*duku* 打稻之槌楷 (卷六の五丁表)

の語が *butūn*, *tūmbi*, *tūku* の代りにみられる。すなはち *tū* に対して *du* が現れてゐる。従つてまた *butūn* (罈) は *budun* (臆病な) と同じ形となつてゐる<sup>(21)</sup>

以上の諸文献において当該諸単語の文語形で *tū* と書かれるその *t* の表す音は、*d* の表す音と同じであると考へられ、*t* は単に当該諸単語に特有な書体であるに過ぎないと考へる。

しかしまた御製増訂清文鑑第九卷畋獵類三丁表には *ulgiyan tumbi* (打野猪围 猪狩をする) といふ語がみえ、*tu* の漢字反切も  $\text{ᠮ}$  である。この *tumbi* は *tūmbi* と同系語或は同一語であると考へられるが、誤字かそれとも *t* が一般に表す音を実際に表すかはなほ問題である。

*tū* の *ū* については母音の条で触れる。

§8 十二字頭の条の第六字頭、第八字頭、第九字頭において、単字末の *k*, *t*, *b* に対してはそれぞれ珂、賦、鋪が当てられてゐる。そのうち珂、鋪の現代北京音は *k'o*<sup>13</sup>, *p'u*<sup>14</sup> であり、賦は不明であるが、単字の *te* に当てられた漢字であり、また *tei*, *ten* に対して反切上字に使

はれてゐる。

しかし珂, 賦, 鋪が軟口蓋音, 歯音ないし歯茎音, 唇音の閉鎖音を表して音節末でこれらが音韻的に区別されるのか, これらに母音が付いたものを表すか, あきらかでない。本稿では漢字音に従つてそれぞれを ko, tē, pu と転写する。特に賦は単字の te にも当てられた漢字であり, なんら区別なくこれら二つの場合に用ゐられてゐるから, つねに tē と転写しないと矛盾が生じる。

なほ, ko, tē, pu で転写される珂, 賦, 鋪が, 音節末の閉鎖音が無声であることを反映するとは勿論言へない。ルードニエフの調査の口語では, 音節末閉鎖音の有声無声如何については後接子音のそれと一致してゐる例が多い。たとへば,

сагда-га	старый	(老いた)	文語形	sakdaka
пыткѣ	нога	(脚) 等	"	bethe
чабдаџа	чай	(茶)	"	cai abdaha

しかしまたつぎの様な例もある。

сабха	палочки для ъды	(食事用の箸)	文語形	sabka
абка	небо	(天)	"	abka
бѡ дукде	комната	(部屋)		

後者は文語の boo dokode (家の内で) に相当するとみられる。

異施清字の条にはつぎの語がみえる。

50ウ	bethe	撥貼阿	botiehě	脚
50ウ	bithe	逼貼阿	bitiehě	書物

逼は言ふまでもなく逼である。すなはち文語形の音節末の t とつぎの音節の h との間に母音が入つて来るのである。ザハーロフはまた北京のシナ化した満洲人について,

シナ語に応じて二つの子音の併発に耐へないでそのゆゑにそれらの間につぎの音節と同種の母音を挿入する。たとへば битхэ (bithe) の代りに битэхэ (bitehe) と, ситхэнь (sithen) の代りに ситэхэнь (sitehen) と, таймпа (taymra) の代りに таймопа (taymopa) と, ашшамби (ashshambi) の代りに ашишамби (ashishambi) と言ふ。<sup>(22)</sup>

と記してゐるが, таймопа, ашишамби の例はかれ自身の説明に合はない。битэхэ の例については本書とは挿入される母音が異つてゐる。

さらに同条につぎの語がみえる。

45ウ	uthai	屋胎	utai	立所に, 即ち
45ウ	uttu	屋秃	utu	このやうに
45ウ	tuttu	秃秃	tutu	あのやうに

ザハーロフはまたつぎの様に記してゐる。

北京の満洲人は, 子音の併発に耐へぬシナ語に応じて, 子音を除いて, 半音節の ть (t) を後続音節とともに一つの音節へ融合させる。たとへば bithesi を битхэши の代りに битэши, битѣши (biteshi, bityeshi) と言ふ。<sup>(23)</sup>

後者の語形はシナ語に入つた筆帖式に一致してゐる。本条の utai もこの様にして生じたものであらう。

乾隆三十一年の序を付した博赫の著, 清語易言 (Manju gisun be ja i gisurere bithe) に, やはり字面を離れた音をもつ文語の単字及び単語を挙げて主として満洲字で説明した箇所がある。挙げられたものは, 僅かを除いて異施清字の条にもみえるものである。<sup>(24)</sup> uttu, tuttu も載つてゐる。すなはち,



uttu (這樣) を, u tu と言ふ,  
tuttu (那樣) を, tu tu と言ふ,

異施清字の utu, tutu 及び清語易言の u tu, tu tu は, t が重子音でないことをおそらく示すものであらう。

### 鼻 音

§9 十二字頭及び切韻清字の二条において, n, m を頭にもつ単字及び切韻字に対しては, 概略的に言つて, それぞれ現代北京語で n, m を声母にもつ漢字が当てられてゐる。

nio に当てた姓の現代北京音は不明であるが, n を頭にもつ他の単字に当てた漢字の現代北京音における声母及び io に当てた悠の現代北京音及び dio; kio, cio; gio, jio; hio, sio の各々に当てた丟, 秋, 揪, 羞の現代北京音における韻母より逆に類推して, 姓はおそらく niu に相当する音を表すものであらう。なほ姓は niowa, niowang, niowe に対する反切上字にも使はれ, その母音については問題がある (§54)。

mang に当てた牻の現代北京音も不明であるが, m を頭にもつ他の単字に当てた漢字の現代北京音における声母と ang に当てた阿様の反切及び ang を含む他の単字に単独に当てた漢字の現代北京音における韻母より逆に類推して, 牻はおそらく mang に相当する音を表すものであらう。

mi に当てられ, またその他の反切上字に用ゐられる嗜の現代北京音も不明であるが, mi の箇所に明衣切と併記してあるから, 本書では現代北京音の mi に相当する音を表すとみる。

すなはち音節の頭における満洲字の n, m に対して, 漢字表記で n, m を当ててゐる。

これらの漢字表記を本稿では n, m で転写する。その漢字が表す音は, m は両唇音の鼻音であり, n は歯音ないし歯茎音の鼻音とみられ, 音節の頭では二種の鼻音が音韻的に区別されると考へられるが, 後者については問題がある。ラートロフはつぎの様に記してゐる。

(前略) ㄋ が一層広く用ゐられることが満洲語において見られる。満洲語において文語で ㄋ は niya, niye, niyo, nio (nija, nije, nijo, nio) で写される。(原文の例は略す)<sup>(25)</sup>  
またルードニェフの調査の口語には, たとへば,

ñāma, ñam	человѣкъ	(人)	文語形	niyalma
ñóңi	зеленый	(緑の)	"	niowanggiyan
ñубу	волкъ	(狼)	"	niohe
ñјуңцо	шестьдесятъ	(六十)	"	ninju

の語形がみられる。

服部先生の調査された口語で, 第一字頭の単字中の n, m は [n], [m] と音読されてゐるが, ni に対する [ni] にはつぎの註記がある。

[ni] は (中略) apical であり, (中略) ごく僅か反転 (retroflex) の傾向がある。

本書において姓, 捏及び切韻字に対する反切上字として用ゐられてゐる場合の呢に表された鼻音が, 歯音ないし歯茎音の鼻音の非口蓋化音か, 口蓋化音か, または硬口蓋鼻音かについては分明でない。

§10 服部先生採録の錫伯方言語彙中につぎの語形がある。

?indʒ' 六十 文語形 ninju

またルードニェフの調査の口語には,

німала- надѣвать (напр. кушакъ)  
(身に着ける (たとへば おび))

文語形 imiyelembi, imiyalambi, umiyelembi, umiyalembi

の語形がみえ、なほまた文語には、

nimenggi (脂肪), imenggi (植物性油), simenggi (桐油)

の類義語がみえる。満洲語文語の語頭の n がない語例は女真語にもみられるが、それについてはここではふれない。これらの語の頭の子音の由来は一つの問題である。

なほ異施清字の条につきの語形がみえる。

48ウ meni meni 摸衣 摸呢 moi moni 各自  
鼻音の反復のゆゑに語中の n が脱落したとみられる。

§ 11 十二字頭の第五字頭においては、ng に終る単字に対し、現代北京音で ng を語末にもつ漢字を当てるか、または様、硬、英を下字に用ゐた反切を当ててゐる。切韻清字の条においても、ng に終る切韻字に対して現代北京音で ng を語末にもつ漢字を単独に当てるか、または反切下字に使つてゐる。

第四字頭においては、n に終る単字に対して現代北京音で n を語末にもつ漢字を当てるか、或は印、因を下字とした反切を当ててゐる。切韻清字の条においても、n に終る切韻字に対して現代北京音で n を語末にもつ漢字を単独に当てるか、または反切下字に使つてゐる。

なほ様、硬、印の例には、ang に対する阿様切及び eng に対する悪硬切及び en に対する悪印切の各一例があり、また英、因は一般的な反切下字として使はれ、これらは ng, n すなはち韻のみを表してゐる。

第十二字頭においては、単字末の m に対して模が当てられてゐる。模の現代北京音は mu<sup>2</sup>, mo<sup>2</sup> である。単字 mu に対して模 蒙屋切と併記してあるのによつて、単字末の m に当てた模も mu<sup>2</sup> の方の音を表すと見たい。

以上の如く音節末における ng, n, m に対して、現代北京音の ng, n, mu が当てられてゐる。本稿ではこれらを η, n, mu で転写する。なほ η で転写する英は、ing にも当てられた漢字であり、その場合には yin と転写するが、単字末の ng に当てられた場合はつねに○英切と記されてゐるから、この二つの場合を区別して転写して差支へない。また模は単字 mu に対してもなら区別なく用ゐられてゐるから mu と転写する。これらの漢字表記は軟口蓋鼻音、歯音ないし歯茎音の鼻音及び両唇鼻音か、これに母音 u のついた音を表し、音節末ではこの三種（ないし二種）の鼻音が音韻的に区別されるとみられる。

しかし語末の n については問題がある。服部先生の調査された口語では、たとへば、

nadan 七 文語形 nadan

の様に [n] が現れるが、ルードニェフの調査の口語では、文語形の -n に対して一様ではない。たとへば、

нурҕан	карта (図)	文語形	nirugan
сүәјің	жолтый (黄色の)	"	suwayan
нада	семь (七)	"	nadan

さらに一語が一様に表記されない例がある。たとへば、

цобун, ц <sup>y</sup> обуң	дорога (道)	文語形	jugūn
а́лн (álı)	гора (山)	"	alin
са́ма (һ), са́ма, са́маң	шаманъ (巫人) 等	"	saman

文語形の -n に対する口語形のこれらの表記から、或は懸壜垂鼻音 [ŋ] が語末音としてこの口

語にあるかもしれないとみられる。

なほ異施清字の条にはつぎの語形がみえる。

47ウ kacilan 喀吃<sup>拉英切</sup> kačilan 射的の練習の矢

なほこのほかに形容詞の疑問形の例がみえる。

45オ akūn 阿空 akun 無いか

45オ saiyūn 薩衣雍<sup>切</sup> saiyun よいか

45ウ yargiyūn 呀尔駒雍<sup>切</sup> yargūn 本当か

これらの語末の *n* は [ŋ] ないし [N] を表す様にみられる。

清語易言にも saiyūn, yargiyūn について述べてある。すなはち、

saiyūn (好麼) を, san yo と云ふ,

yargiyūn (真麼) を, yar giong と云ふ,

とある。前者は異施清字の条の語形とは別のものであり、ルードニエフの調査の口語の語形に類するものである。すなはち、

cānny-i, cāny-i хорошо-ли? (よいか)

また異施清字の条につぎの語がある。

48オ hūwanggiya 慌烟 huanyen えびら

これは語末の *n* の有無に関する二形である。ザハーロフの満露辞典にも hūwanggiyan とともに古廢語として hūwanggiya の形を載せてある<sup>(26)</sup>

なほまた同条にはつぎの記述がみえる。

凡小 *i* 字。若隨在 an, en, in 頭兒字下念呢。如隨在別者頭兒字下俱念衣。独是 ang, eng, ing 頭兒字下。不可用此小 *i* 字。只用大 *ni* 字。再 a e i 頭兒字下。有聯写小 *i* 字者。与单写義同。別者頭兒字下。聯写不得。只可单写在下随用。

語幹末に *n* をもつ語の後で名詞所有格語尾 *i* は呢と読まれるという。呢は本稿では *ni* と転写される。

このことはまた三合便覽の清文指要にもみえる。すなはち、

*i* 字 an en in 字頭下読為呢余読依 a e i 字頭下可聯写 ang eng ing 字頭下則用 *ni* 字 体異而義同<sup>(27)</sup>

清語易言にも記されてある。

(前略) この小さい *i* は, an en in の頭の字の下で用ゐれば *ni* と読む。(此小衣字在第四個頭兒字下用諗呢) (後略)<sup>(28)</sup>

御製増訂清文鑑においてその収録満洲語単語に付した表音漢字も、語末に *n* をもつ語に後接するその *i* に対するものは尼である。なほ先行語の語末の *n* には別に *n* を表す漢字が付してある。名詞所有格語尾 *i* は、語幹と一つの息の段落として発音されて、語幹末の *n* が重子音となるのではないかとみられるが、実際に口語でどうかみなければならぬ。( *n* の重子音化については § 13 も参照。)

異施清字の条にはまたつぎの例がある。

51ウ gelhun akū 哥擻婚那枯 gēlūhun naku 敢てする

52オ šašun akū 沙書温那枯 šašun naku こまごまに碎けた

沙の漢字は、十二字頭及び切韻清字の条で満洲字に当てた例はみられないが、現代北京音は sha<sup>1</sup> であり ša と転写する。( § 21 参照)

前者はまた清語易言にみえる。すなはち、

gelhun akū (敢) を, gel hun na kū と云ふ,

これらの例における akū も、先行語と一つの息の段落として発音されて先行語の語末の *n* は

重子音となるのかもしれないが、実際に口語でどうであらうか。

§ 12 異施清字の条の四十三丁裏から四十四丁表にわたつては、ng に後続する g をふくむ単字が文字通りに読まれずに、以下に示す漢字の音に読まれることが記されてゐる。

-ga(-ga)	啊	-gan	安
-go(-go)	窩	-gen	恩
-gū(-gū)	} 屋	-gon	} 温
-gu		-gun	
-ge	哦	-guwen	
-gi	衣	-gin	} 陰
-giya	呀	-giyen	
-giye	噫	-giyan	烟

なほ giya, giye, giyen について「此三字。亦有仍照本音読者。」と記してゐる。

窩屋衣呀噫温陰烟(烟は烟の誤字とみる)の漢字については母音の条において述べるが、これらの漢字は他の場合に用ゐられた際、それぞれ wo, wu, i, ya, ye, wen, yin, yen と転写されるものであり、この場合も同様の音を表すとみられ、やはりその様に転写する。

啊, 哦, 安, 恩は主としてこの場合にのみ用ゐられる。それぞれの現代北京音は a<sup>14</sup>, ê<sup>12</sup>, an<sup>1</sup>, en<sup>1</sup> であり, a, e, an, en と転写するが、以下に述べる様に多少問題がある。

この事実は清語易言にも記されてゐて、そこに挙げられた単字の例を異施清字の条のものとからべると、たがいに異なる例も含まれてゐる。以下にその全例を引用する。

(前略) ge (哥) を, e (哦) と言ひ,  
 geo (溝) を, eo (欧) と言ひ,  
 ga (嘎) を, a (啊) と言ひ,  
 gao (搞) を, ao (嗷) と言ひ,  
 gan (干) を, an (安) と言ひ,  
 gai (該) を, ai (愛) と言ひ,  
 gū (孤) gu (姑) を, u (兀) と言ひ,  
 go (郭) を, o (握) と言ひ,  
 gun (滾) を, un (温) と言ひ,  
 gi (雞) を, i (依) と言ひ,  
 gin (金) を, in (陰) と言ひ,  
 giyan(儉) を, yan (煙) と言ひ,  
 giyen(津) を, yen (銀) と言ひ,  
 giya (家) を, ya (呀) と言ひ,  
 guwe(鍋) を, we (握) と言ふ(後略)

欽定清漢對音字式の第一字頭及び第四字頭にはつぎの様に記されてゐる。

ga 重読 噶平声読。語氣内応読作阿字(中略)者。仍以阿字(中略)对音。  
 go 重読 国。郭。俱平声読。語氣内応読作武字(中略)者。仍以武字(中略)对音。  
 ge 歌。格格字。平声読。語氣内応読作額字者。仍以額字对音。  
 gi 基。機。吉。吉字。平声読。語氣内応読作伊字者。仍以伊字对音。  
 gan 重読 幹幹字平声読。語氣内応読作(中略)安字者。仍以(中略)安字对音。  
 gen 根語氣内応読作恩字者。仍以恩字对音。  
 gin 金。錦。謹。錦謹二字。平声読。語氣内応読作音字者。仍以音字对音。

gun <sup>輕</sup> 滾平声読。語氣内応読作温字者。仍以温字对音。

阿武額伊安恩温は、この書においてそれぞれ a, u, e, i, an, en, un に当てた漢字である。音の漢字は第四字頭で ing に当てられてゐるが、この ing は明かに in の誤字である。すなはちこの記述は、この書の他の記述におけると同様に明瞭を欠くが、やはり上述の事実を示すものとみられる。

ザハーロフも北京の満洲人についてつぎの様に記してゐる。

たとへば形容詞における如くもし га, гэ, го, гу ga, ge, go, gū の諸音節における硬音及び軟音の г (g) に半音節 нь ng が先行すれば, нга, нгэ, нго, нгу (ngga, ngge, nggo, nggū) の諸音節の北京の満洲人による発音においては子音 г (g) は消失する。たとへば mangga は манга の代りに манъа (manga) であり, manggi は манги の代りに манъ-и (mang-i) であり, eldengge は элдэнгэ の代りに элдэнъ-э (eldeng-e) であり, horonggo は хоронго の代りに хоронъ-о (horong-o) であり, falanggū は фалангу の代りに фаланъ-у (falang-u) である。<sup>(29)</sup>

この事実は口語の発音を反映してゐるものとみられる。服部先生の調査された口語においてもつぎの二例があるが、いずれも軟口蓋鼻音のみ現れてその後と同じ位置の閉鎖音は現れてゐない。

niḡun	六	文語形	ninggun
miḡan	千	"	minggan

ところがルードニェフの調査の口語には、

(1) miḡa	тысяча (千)	文語形	minggan
oḡo-	забыть (忘れる)	"	onggo-
jiḡḡ	языкъ (舌)	"	ilenggu
kiḡeḡi	кость (骨)	"	giranggi

の如き例も多いが、またつぎの如き例もあるのである。

(2) fiḡan	Большой Хинганский хребетъ (大興安嶺)	文語形	hinggan
eniḡe	сегодня (今日)	"	enenggi
niḡiḡe	масло (油)	"	nimenggi
iniḡiḡi; iniḡiḡi; iniḡiḡi	день (日)	"	inenggi

またさらにつぎの如き例もみられる。

(3) ṣaḡi (sheḡji)	дымъ (煙)	文語形	ṣanyan
caḡi	кровь (血)	"	senggi

すなはち(2)においては、軟口蓋鼻音の後に同じ位置の有声閉鎖音が現れる例がある。異施清字の条にも、既述の様に或単字は字面通りにも読まれることが記されてゐる。

服部先生の調査された吉林省のシナ化した特殊な満洲語において、吉林の老人の発音には、

niḡ'vḡ	六	文語形	ninggun		
't'āḡ'u	屢々	't'āu'u	百	"	tanggū
'miḡ-aḡ	千	"	minggan		
'ni'maḡ'ḡi:	雪	"	nimanggi		
'aḡ-a	嘴	"	angga		

「屢々 [aḡ-a] となり [aḡa] と聞こえることもある。」と付記されてゐる。

'ḡiḡ-əli	耗子	文語形	singgeri
----------	----	-----	----------

の例があり、最後の語に対しては、満洲字で *singeri* と書いたとみえてゐる。その発音は、シナ語の音韻体系に基いたものであるが、やはり上掲の記述に一致するものであらう。扶余の老人には、

nin <sup>ˈ</sup> ɡun <sup>ˈ</sup>	六	文語形	ninggun
t'an <sup>ˈ</sup> ɡu: <sup>ˈ</sup>	百	"	tanggū
'miŋ <sup>ˈ</sup> (g)aŋ	千	"	minggan
nimaŋ <sup>ˈ</sup> ɡi: <sup>ˈ</sup>	雪	"	nimanggi

の例がみえるが、これらが文語を文字の上から習得した結果とのみみることはできない。上掲のルード・ニュー調査の口語には(2)の如き例があるからである。

以上のことは、ŋ のあとの軟口蓋閉鎖音が消失したことを示すともみられるが、文語の正書法における ngg という書方は、或は蒙古字を借用する際にその正書法をも無条件に受け入れたものかも知れない。

異施清字の条のこの記述は同条の四十六丁表より前にあるから、この読方を一般的のものであると認めてゐると言へる。従つて異施清字の条の四十六丁裏以下においても文語形に字面通りの音を当てた例はみられない。以下は同条のこの点のみを示す例である。

45オ	hūwanggiyarakū	荒呀拉枯 <sup>(31)</sup>	huanyaraku	妨げぬ
45ウ	nanggin	那英陰切	nanjin	廊下
"	šenggin	生陰	šənjin	ひたひ
"	tanggū	湯屋	taŋwu	百
"	tanggūli	湯屋哩	taŋwuli	中央の部屋
"	cingiya	青呀	ćinya	そう遠いとは思はぬ、 実際の距離ほどに感ぜぬ

cingiya とは書かれてゐない。この点に関して満洲語にときどきみられる書き誤りである。

45ウ	jinggiya	精呀	jinia	目の縁のできもの
-----	----------	----	-------	----------

つぎの例はやや異つてゐる。

51オ	niowanggiyan	姓湾烟切	niuanyen	緑
45ウ	šanggiyan	山烟	šanyen	白、けむり
"	janggin	占陰	janjin	職掌階級ある官吏
"	genggiyen	金陰	ginjin	清い
50ウ	canggi	挽衣	ćani	……あるのみ

あとの三語は清語易言にもみえてゐる。すなはち、

janggin (管尉) を, jan in と云ふ,  
genggiyen (清) を, gin yen と云ふ,  
canggi (純是) を, can i と云ふ,

とある。これらの語形は、軟口蓋鼻音がそれに後続する母音 [i] または半母音 [j] の影響で硬口蓋鼻音或は歯音ないし歯茎音の鼻音に変化したものと考へられる。なほ文語の šanyan はこの形を写した語であらう。また、

48ウ	suwayan	酸烟	suanyen	黄
-----	---------	----	---------	---

のような例がみられる。

なほまたつぎの例がある。

52オ	emgi	惡 <sup>嚙</sup> 切 <sup>因</sup> 衣	ěmini	一緒に
-----	------	---------------------------------	-------	-----

” nemgiyen 諾模陰 nēmuyin 温和な  
またつぎの二例もここに付記しておく。

50ウ dongmo 多摸 domo 茶壺

” manggi 媽烟切 衣 または 那烟切 衣 mani または nani ……した後

清語易言には、これらの語のほかにも本条にみえぬつぎの語も載つてゐる。すなはち、

dongmo (茶桶) を, do mo と云ふ,

manggi (而後) を, man i と云ふ,

singkeyen (陰冷) を, še ke yen と云ふ,

異施清字の条の manggi の例では語頭に n の現れる点が注目される。

啊および安の漢字には、上述の場合に使用されるばかりでなく語頭に用ゐた例がある。

46ウ aba 啊八 aba どこ

阿八 aba 卷狩り

45オ ainci 安七 anci 思ふに

50オ anfu 安夫 anfu 守備

aba には特に何在、困獵と意味を付し、二者に異なる漢字を当ててゐる。ainci は満洲外聯字の条にもみえ、やはり安七の漢字を当て想是と意味が付してある。これらはいづれも問題をはらんでゐる。aba については、十二字頭の条で a に当てた阿とは別字である啊は、或は異なる音を示すものではないかとも考へられる。どこの意味の疑問詞にまた ya ba がある。

ainci は清語易言にもみえ、

ainci (想是) を, an ci と云ふ、

とある。これも十二字頭の条で an に当てた暗を用ひずにこの安の字が用ひられてゐる点、それと異なる音を示すものではないかとも考へられる。同義語に hode がある。また類似した意味の語に aimaka, yamaka (なにか) がある。これらはいづれも語源的には疑問詞をふくむと考へる。疑問詞の ai, ya, we についてはさらに語源的に調べねばならぬ。なほ yabade に当る語形はルードニェフの調査の口語にもみえてゐる。すなはち、

јабде гдѣ (どこに)

anfu に当てた安夫が anfu ならば、字面通りの音を示すことになり、「異施清字」の意味が生じない。この場合にも安が暗と異なる音を示すものではないかと考へられる。この語も清語易言にみえてゐる、

anfu (鎮守) を, an fu と云ふ、

とある。なほ満洲字は異施清字の条では *āleph + āleph + āleph + fu* であるが、清語易言では *āleph + āleph + nūn + fu* である点が異なる。満漢同文全書には a の字の部に anafu (駐防) の語がみえ、さらに an の字の部には *āleph + āleph + āleph + āleph + fu* (戍兵, 駐兵) および *āleph + āleph + āleph + āleph + fu* tebuhe cooha (戍兵) の二語がみえる。この二例の *āleph + āleph + āleph + āleph + fu* は anfu の誤字であらう。御製増訂清文鑑第八卷兵類六丁表には anafu cooha (戍守兵) の語がみえる。これらの点を考へると、異施清字および清語易言の満洲字は anafu の誤字ではないかとも考へられる。

§ 13 歯音ないし歯茎音の鼻音の後にそれと調音位置の同じ有声の閉鎖音または破擦音がある場合に、後者が前者に同化して消失する過程の種々の段階を示すとみられる語形が異施清字の条にみられる。

50オ donjiha 端飢哈 duanjīha 聞いた

または端呢哈 duanniha

“	fonjiha	番呢哈 または番飢哈	fanniha fanjiha	尋ねた
“	banjimbi	班呢嘑	bannimi	生む
“	sindaha	詩那哈 または身那哈	šīnaha šēnnaha	放つ、置く
“	henduhe	呵奴呵 または呵因奴呵	hēnuhe hēnnuhe	語つた

すなはち donjiha, fonjiha の二語においては原形と同化した形がみられ、banjimbi の語においては同化した形がみられ、また sindaha, henduhe の二語においては同化した形とさらに同化して消失した形がみられる。なほ sindaha については、無圈点満洲字で書かれた語に有圈点満洲字で書き換へた形を添へて示した辞書体裁をなした無圈点十二字頭 (Tongki fuka akū hergen i bithe) に、フックスによれば、無圈点字で sinafi といふ語形があり、それは有圈点字の sindafi に当るとされてゐて、<sup>(32)</sup> やはり sindambi の活用形である。無圈点満洲字の文語に上述の子音の消失した形があることが注意される。henduhe については清語易言に、

hendumbi (説) を、he nu mi と言ふ、  
とある。

また異施清字の条にはつぎの語がある。

49才 ere funi 惡勒 芬泥 ěrě fēnni このたび、この時  
ザハーロフは、かれの満露辞書に ere foni, ere fonji, ere funi の語を挙げ、ere fon i の語から来たとして этого времени, этотъ разъ (このたび、今回) の意味を与へてゐる。なお ere fonji, ere funi には今は全然使用しない古い語を示す \* の印を付してゐる。この例でも、n のあとの有声子音が消失したことも考へられるがあきらかでない。

なほ異施清字の条にはつぎの形がみえる。

45才	yali	烟哩	yenli	肉
49才	yalingga	烟哩英啊 切	yenliŋa	肥えた
“	yalihangga	烟哩夯啊	yenlihaŋa	肥えた
48才	gajimbi	竿飢嘑	ganjimi	持つて来る
“	gaju	竿朱	ganju	持つて来い

yali の例は清語易言にもみえる。すなはち、

yali (肉) を、yan li と言ふ、

とある。上掲の文語形 suwayan に対する形とともに、これらの文語形に対する形が古いものであるか否かについては、ここには述べられない。

#### § 14 異施清字の条にはまたつぎの形がみえる。

46ウ	-mbi	嘑 または 摸	mi または mo	動詞の現在語尾
“	-mbio	嘑幽 切	miu	同上の疑問形
50才	endembio	惡印得嘑幽 切	ēndēmīu	違ふものか、だませようか

この形は清語易言にもみえる。すなはち、

-mbi (比) を、mi (米) と言ひ、また me (摸) と言ふ、

-mbio (比有) を、mio (米有) と言ふ、

とある。ザハーロフは北京のシナ化した満洲人についてつぎの様に記してゐる。

直説法現在時の動詞の語尾の мби (mbi) は大抵 ми (mi) と発音する。なぜならば



би (bi) といふ単語は、ときにシナ人の耳にとつて不快にひびくからである<sup>(33)</sup>  
 ルードニェフの調査の口語には両形が現れてゐる。たとへば、

зи-ми приду (わたくしは来るだらう)  
 jobū-мби ъдетъ (かれは行く)

服部先生の調査された吉林省のシナ化した特殊な満洲語において、吉林の老人には、

'mò·ni 'bàit'alam ,bi' 我要

の形がある。

御製増訂清文鑑鬼怪類には hailambi, hailami, hailaha (不受享 神が享けぬ) の同義語があるが、hailami は上述の形とみられ、おそらく口語を反映するものであらう<sup>(34)</sup>

動詞の現在形の語尾の文語形と異なる上述の形は、唇音の鼻音の後の同じ調音位置の有声閉鎖音が前者に同化して消失したものと考へる。ザハーロフの説明には充分には従へない。

なほ異施清字の条には -mbi に対して mi, mo の二形があり、また清語易言にも mi, me の二形が載つてゐる。シロコゴロフも文語 gurimbi に対する口語形を kur'imb'e (家族および家畜とともに、移転する、遊牧する) と記してゐる<sup>(35)</sup>

異施清字の条の -mbi に関する上掲の記述は、四十六丁裏にあり、必ずしも一般的な事実とは言へぬ様にみえるが、本書では普通 -mbi に対しては噬の漢字を当ててゐる。しかし同条にみえるつぎの二例は例外である。すなはち、

52オ ombi 傲噬 aumi できる、なし得る  
 または傲模 aumu  
 “ ombikai 傲模開 aumukai できます

模が摸の誤字とは断定できない。この模が語末の i が脱落した形を反映するか、或は i が u になつたかないしそれに近くなつたことを示すかは不明である。

なほ清語易言には dambagu (たばこ) について、

dambagu (煙) を、dam gu と言ふ、  
 とある。ルードニェフの調査の口語にも、  
 тамба табакъ (たばこ)

とある。

異施清字の条のつぎの一語もここに付記しておく。

48ウ bonio 摸舛 moniu 猿  
 文語形にも bonio, monio (猿, 申) の二形がある。

## 流 音

§ 15 十二字頭の条において、l を頭にもつ各単字及び r を頭にもつ各単字に対しては、現代北京音で l を声母にもつ同一漢字を全く並行的に使用して、単独に当てるかないし反切上字として用ゐてゐる。ただし r の場合はその漢字に滾舌念と記してゐる。切韻清字の条においては、概略的に言つて、l を頭にもつ切韻字に対し、現代北京音で l を声母にもつ漢字を単独に当てるかまたは反切上字に使つてゐる。

ただし liowan, liowen, liowei に対する反切下字に用ゐられてゐる溜の現代北京音は不明であるが、l を頭にもつ他の単字に当てた漢字の現代北京音における声母及び io を含む他の切韻字に当てた漢字の現代北京音の韻母より逆に類推して、この溜はおそらく lü に相当する音を表すものであらう。(§ 54 参照)

滾舌念 (舌をころがして読む) については、最初に第一字頭 ra のところで説明を付してゐ

る。すなはち、

滾舌者。舌尖上貼。用氣吹動舌尖也。余俱同此。

とある。この音は齒茎音の舌尖顫動音とみられる。

一学三貫清文鑑の十二字頭第一字頭でも、la le li lo lu lū および ra re ri ro ru rū にそれぞれ拉，勒，立，魯窩，嚙，魯窩の同一漢字を当ててゐるが、ra re ri にはやはり滾舌音と記してゐる。また第三字頭（この字頭の単字末は r である）には、此字頭。皆以滾舌念之。と記してゐる。

しかるに服部先生の調査された口語では、音読の際文語 r に対して現れる [r] は摩擦音または flapped であると記されてゐる<sup>(36)</sup>

しかし本書の記述は、その語義を素直にとつてみてやはり顫動音を示すものであらう。

なほ第三字頭の条には、この字頭の発音一般を説明して、

係滾舌啣嚙尔音。読法。只将 a e i 頭每箇字下。添一啣嚙尔。緊々連念即是。

と記してゐる。ここでは単字末の r に尔を当ててそれを啣嚙（口の中でブツブツ言ふ）と形容してゐる。同字頭 or のところにもこの語がある（§33）。

これに対して第十一字頭においては単字末の l に擲を当ててゐるが、この字頭一般の発音を説明して、

係舌尖上拄喉音。読法。只将 a e i 頭每箇字下。添一擲字緊：連念即是。擲字者勒

茲切。乃舌尖上貼不動。舌根下窪也。余俱同此。

とある。後半の記述によれば、擲の表す音は齒音ないし齒茎音の側音であるとみられる。単字の頭の l に当てた漢字も同音を表すものだらう。

すなはち本書において r, l の表す音はそれぞれ顫動音、側音であり、本書の満洲語において音節の頭と末尾で両音に音韻的区別があるとみて差支へなからう。従つてその漢字表記も区別して転写する。十二字頭の条においては、r, l をそれぞれ頭にもつ単字に対して同一漢字を当てても、r の場合は滾舌念と記して区別してゐる。従つてこの付記の有無により、r, l と転写することにする。しかるに異施清字の条においては、r, l を頭にもつ単字に当てた漢字はやはり同一であるが、両者に対してなんら区別なく使用されてゐる。しかし敢へてその漢字の当てられた文語形に基いて r, l と転写することにする。

単字末の r, l には上述の様にそれぞれ尔，擲が当てられてゐる。尔の現代北京音は êrh<sup>2,3</sup> であるが、上掲の様にそれと異なる啣嚙の音を表す単なる記号とみられるので、これは r と転写する。擲は現代北京語にはない様だが、上掲の如く勒茲切とあるから lū と転写する<sup>(37)</sup>

尔が本書において現代北京音の êrh とは異なる音を表すといふことは、異施清字の条にみえる下記の語例においても知られる。すなはち現代北京音で尔と同音の二，児を却つて満洲字の el, l に当ててゐる。

43オ	el	二	二
"	ul	五兒	子供、動物を呼ぶ名
"	bal	八兒	"
"	sal	三兒	"（猿の意味もある）
"	jol	住兒	"
"	piyal	偏兒	"
"	siowel	雪兒	"
51ウ	elšose	二小子	子供の名前
"	eldase	二達子	"
"	elyatu	二丫頭	"

“ elhei 二黒 人名

実はこれらの単語はシナ語を逆に満洲字で写したものであるから漢字音の転写は付けないことにする。意味もシナ語の意味を示しておく。なほ elhei の語に対しては本書で特に人名の場合さう読むと記してあり、人名であることが示されてゐる。

従つて現代北京音で尔と同音のシナ語の二、兎を、尔の当てられてゐる満洲字の r で写さずに、却つて擲の当てられてゐる満洲字 l を使つて el, l と写してゐるのである。この点は尔がその漢字音と異なる音を示すとみてよいであらう。

服部先生の調査された吉林省のシナ化した特殊の満洲語においては、文語の r, l の区別に当るものは実際の発音にはない。ルードニェフの調査の口語では p に対して l, ɲ が現れてゐる。l は多く i の前に現れ、ɲ は多く他の母音の前に現れてゐる。これはロシア語の軟音 ль と硬音 л の区別の如きものを表してゐるかも知れぬが、この資料には特に表記法を説明してないから不明である<sup>(38)</sup> シロコゴロフも満洲語に対して l, ɲ を区別してゐるが、さらにその l について、

満洲語において唇音、歯音及び喉音が後続するときは、舌は口蓋にも歯槽にも付かない<sup>(39)</sup>

と記してゐる。

§ 16 御製増訂清文鑑愛惜類の guwelke, guweke (小心著 注意せよ)<sup>(40)</sup> 同書完全類の urku-lji, urkuji (連綿 絶えず)<sup>(41)</sup> 及びザハーロフの満露辞典にみえる gūldun, gūdun (穹隆), kuwelcihe, kuwecihe (鳩) 等の二形をもつ語は、l (おそらくくらい l) の脱落によるものであらう。ルードニェフの調査の口語に、

гумоѳо заяцъ (兎) 文語形 gulmahūn, gūlmahūn  
 ḡama, ḡam челоуѳкъ (人) “ niyalma

の形があり、やはり側音の脱落とみられる。

異施清字の条において、

47ウ uruldembi 屋尔得噠 wurdēmi 馬を駆けさせて遅速をためす

の形は、上述の諸形と同様に側音が脱落し、さらに母音が脱落したと考へられる。なほ本条において側音の脱落の例はこれのみである。この形はまた清語易言にみえる。すなはち、

uruldembi (跑等) を、ur de mi と言ふ、

とあり、ザハーロフの満露辞典もこれら二形を載せてゐる。つぎに、

50オ ergi 不滾舌 惡衣切雞 ēigi ……の方, ……の側

“ cargi 不滾舌 釵雞 čaiigi あちら

52オ emgeri 不滾舌 一度

は r が脱落した形とみられる。前二者も清語易言にあるが、特に ergi の意味が注意される。

ergi (這辺) を、ei gi と言ふ、

cargi (那邊) を、cai gi と言ふ、

とある。emgeri には音を表す漢字は当ててない。ザハーロフの満露辞典には emgeri, emgei の二形が載つてゐる。また、

50オ serguwen 塞尔坤 sērkun 涼しい

は r の後で有声音が無声化した例である。清語易言にもみえ、

serguwen (涼爽) を、ser kun と言ふ、

とある。

なほまたザハーロフの満露辞典には buldurimbi, budulimbi (つまづく) の二形をもつ語がある。その原形は \*buldulimbi か或は \*burdurimbi かであつて、二つの l または r が異化を

おこして buldurimbi を生じ、また \*buldulimbi か、異化による \*burdulimbi における d の前の l または r が脱落して budulimbi を生じたものであろうか。

### 摩 擦 音

§ 17 十二字頭及び切韻清字の二条において、文語の f, s, ś, h をその頭にもつ単字及び切韻字に対しては、概略的に言つて、それぞれ現代北京語で f, s, sh, h を声母にもつ漢字が単独に当てられるか、或はこれらの漢字が反切上字に使はれてゐる。ただし、si, hi をその頭にもつ単字及び切韻字はその限りでなく、これらに対しては、ともに現代北京語で hs を声母にもつ漢字が単独に当てられるか、或は反切上字に使はれてゐるが、hi の場合に用ゐられた漢字にはいずれも咬字念と付記してある。

なほ šo, šū, šuwe に当てられ、また ś を頭にもつ他の単字に対して反切上字に用ゐられた説の現代北京音には shuo<sup>1</sup>, shui<sup>4</sup>, yüeh<sup>4</sup> の諸音があるが、説はこのうち shuo<sup>1</sup> に相当する音を表すとみられる。

ha, h'a に当てた哈は、その現代北京音が ha<sup>1,3,4</sup>, ka<sup>1,4</sup> であるが、この場合夯呀切と併記してあるから現代北京音の ha に相当する音を表すとみる。

hai, h'ai に当てた咳の現代北京音には hai<sup>1,2</sup>, kai<sup>2</sup>, k'o<sup>2</sup> がある。音韻逢源にはこの字は巳部六、坎二、婁十六、巽一にあり、hai<sup>1</sup> を表すといへる。なほ kai, k'o に相当する箇所にはみえぬ。本書の咳も hai に相当する音を表すとみることにする。

heng に当てた哼は、その現代北京音には hêng<sup>1</sup>, ung<sup>4</sup> があるが、一般的な音である hêng<sup>1</sup> に相当する音を表すとみる。

すなはち音節の頭における満洲字 f, s, ś, h (ただし si, hi の場合を除く) に対して、f, s, sh, h の現代北京音が当てられてゐる。ここに四種の摩擦音が区別される。その漢字表記を f, s, ś, h と転写することにする。

また si, hi の場合の s, h に対してはともに現代北京音で hs が当てられてゐる。しかし後者に当てられた漢字には咬字念と付記されてゐて、本稿では s に当る hs と h に当る hs を区別して ś, h と転写することにする。異施清字の条では咬字念の付記はみられず、両者に対して区別なく hs を含む漢字を使つてゐるが、その漢字の当てられた文語形に基いて ś, h と区別して転写する。ś, h と区別して転写する根拠は、破擦音の条 (§ 24) に破擦音の場合と一緒にまとめて述べる。

本書においては、それぞれの音価について精しく知ることができないが、服部先生の調査された口語においてはつぎの様に音読されてゐる。

fa fe fi fo fu fū

fa fə fi fò fu fò

sa se si so su sū

sa sə sí sò su sò

śa śe śi śo śu śū

ʃa ʃə ʃi ʃò ʃu ʃò

ha ho hū he hi hu h'a h'o

ha hò hu xə xí xu xa xò

f については, [f] は歯唇音であることが註に記してある。しかしシロコゴロフはこの点について,

f— 多少とも英語の f に近いが, しかしこれは両唇音である<sup>(42)</sup>と記してある。方言的相違として歯唇音 [f] に対して両唇音 [Φ] が存在することは, 特に満洲語において充分考へられることである。(§ 50 参照)

s については, si の場合を除いて [s] が現れてゐる。si の場合には [ṣ] が現れる。これについてはつぎの註がある。

[ṣ] は日本語の「シ」の子音に近い dorsal の音である。(以下略)

š については [ʃ] が現れてゐる。これについてはつぎの註がある。

満洲人の [ʃ] は反転の度強く, ロシヤ語の ш に近い, (以下略)

他の記述においては [ʃi] について,

[ʃi] は支那語北京官話の「詩」shih に非常に近い (母音も retroflex なる点に注意)<sup>(43)</sup>と記し, さらにイエスペルセンの非字母的記号で [ʃ] は β<sup>18</sup> 或いは 1<sup>8f</sup> と表されてゐる。

h においては [h] [x] [x̣] が現れるが, 前者と後二者の区別については閉鎖音の条 (§6) にすでに述べたし, [x̣] については破擦音の条 (§24) に述べるからここにはふれぬ。なほ [h] についてはつぎの註がある。

満洲語の [h] は軟口蓋後縁に於ける摩擦音も聞える。

この点は他の記述にも記されて,

但しこの [h] は軟口蓋後縁に於ける摩擦音である事が多い, 併し [x] よりは後!<sup>(44)</sup>とある。

すなはちこの口語では文語の f, s, š, h の音読の際にそれぞれ [f]; [s], [ṣ]; [ʃ]; [x], [x̣], [h] の無声摩擦音が現れてゐる。

本書においては, そのうち se と še について後節に述べる様に多少問題がある。(§ 27 参照)

なほ外字 (tulergi hergen) ž を頭にもつ単字及び切韻字に対しては, 十二字頭及び切韻清字の二条において現代北京語で j を声母にもつ漢字が当ててある。すなはち ž には j が当てられてゐる。本稿ではそれを ž と転写する。なほ ž の表す音が必ずしも外国語音でないのではないかといふ疑問がある。

また外字 sy に対して, 十二字頭の第一字頭において現代北京音が ssü<sup>4</sup>である四の漢字を当ててゐる。すなはちこの外字はシナ語のかかる音節を写すものとみられる。本稿では sü と転写する。(§ 21 参照)

服部先生の調査された口語では ž は [ʒ] と, sy は [sü] と音読されてゐる。

満洲語の音節の頭における摩擦音には, 調音位置よりみて, 両唇音ないし歯唇音, 歯茎音, 反転音, 前軟口蓋音及び後軟口蓋音があり, 音韻的に区別されるとして考へて行く。

### § 18 母音間の摩擦音は有聲の場合があることを示す資料がある。

ルードニェフの調査の口語では, 語頭に唇音の無聲音 Φ も有聲音 w も現れるが, 母音間では二者のうちほぼ有聲音 w のみが現れる。すなはち,

ewen	хлѣбъ (パン)	文語形	efen
xáwaŋ	чиновникъ (官吏)	"	hafan

この w は或は弱摩擦音であらう。また語頭には無聲音 c, c̣, ш, ш̣ が現れるが, 母音間には主としてその有聲音と思はれる з, ж が現れる。たとへば,

јаза	глаза (眼)	文語形	yasa
кізер-	разговаривать (語る)	"	gisure-

paўze-	насмѣхаться (嘲笑する)	”	basu-
сузаї	пятьдесятъ (五十)	”	susai
кўже, кужі	ножикъ (小刀), ножъ (庖丁)	”	huwesi

があるが、また ш の現れる例もある。すなはち、

aїшіла-	помогать (助ける)	”	aisila-
---------	----------------	---	---------

また語頭には無声音 x が現れるが、母音間には無声音 x とともにまた有声音 ɣ が多く現れる。

дагурі	дахуръ (народъ) (ダグール (民族))	文語形	dahur
ѳѳе	дурной (悪い)	”	ehe
наѳан	лежанка (温突)	”	nahan
німаѳа	рыба (魚)	”	nimaha
чубá, чуха	солдатъ (兵士)	”	cooha

さらに文語形の母音間の h に対して、この口語で母音間の ɣ が現れる例も多い。たとへば、

бі-ге	быль (あつた), есть (ある)	文語形	bihe
wige	зубы (齒 (複数))	”	weihe
tīgē	сорокъ (四十)	”	dehi

ラートロフは、上掲の様に (§6) 錫伯方言に k, g, x とともに ɣ があることを記してゐる。その箇所の例に, хаґа, хендуреме, хоґирұн, баґа, оґо, беґе の語形もみえ, それらは文字上では haha, henduheme, hūjihūn, baha, oho, behe となると記してゐる<sup>(45)</sup> これらの例において ɣ は母音間に現れてゐて, しかもそれが文語形の h に対応してゐる点に注意される。なほこの ɣ が x とともにそれぞれ独立の音韻としてこれらの口語に存するかは疑問である。むしろ一音韻としての音声的相違ではなからうか。また同箇所の例には gisurembi の語形もみえ, また上掲の別のかれの記述 (§2) には「gisun」の語形がみえるが, さらに別の箇所に挙げた例には, gizun, amba-za, gizu-re-ɣe, ɣu-ze の語形がみえる<sup>(46)</sup> z も母音間にあり, 満洲字の s に当る点に注意される。

すなはちルードニェフの調査の口語及びラートロフの調査の錫伯方言では, 母音間には有聲摩擦音が来て, 無聲摩擦音は来ないといふ制限が (後者においては少くとも軟口蓋音について) 或程度存したのではないかとみられる。

ところが新疆の満洲人について服部先生が調査された口語には,

qexi	四十	文語形	dehi
------	----	-----	------

の一例があり, 母音間に無聲摩擦音が現れてゐる。

アミオの満洲韃靼語文法の発音法を述べた箇所にもまたつぎの様に記してある。

f はときどき子音 v の如く発音される, たとへば oforo と書かれて, ovoro と発音される。

s はしばしば z (訳註 z の文字に等しい。) の音をもつ, (後略)。

h は一般にいきの出る音 (sspirée) であるが, しかし語頭及び語末におけるよりも語中において一層軟な (doux) 風に発音される。

この記述は明瞭なものではないが, 摩擦音は無声のみでないことが知られる。

アダムは s が母音間で z になり, f が語中で v となると記してゐる<sup>(47)</sup>

シュミットはこの点を精しく述べてゐる。

母音間の唇音 f を北方満洲人は v の如く発音する。これは母音 u に似てゐて, 英語の w を以つて表記されうる。(原文の例は略す。)<sup>(48)</sup>

二つの母音の間の s 及び ś の文字は北満洲においてしばしば有聲に (tönend) 発音される。(原文の例は略す。)<sup>(49)</sup>

軟口蓋摩擦音については明瞭に記してゐないが、つぎの様に述べたところがある。

(前略) また二つの母音の間の無声子音は或一般的な音韻規則に従つて非常に容易に有聲となる<sup>(50)</sup>

ただしこれらの記されてゐるかれの論文は一般にかなり検討の余地のあるものである。

清語易言の記述は後節 (§ 19) に示すが、si を zi と言ふとある。如何なる場合にかうなるのかはこれだけからでは不明であるが、さらにまた既述した様に umesi を e me zi と言ふとある (§ 57 参照)。この例は母音間の s が有聲音であることを示してゐる。従つて上述の一般的説明もかかる母音間の場合を指してゐるのではないかと考へられる。

§ 19 十二字頭の条の第二字頭、第十字頭を除く各字頭の si を含む単字は、そこに付した漢字の音に必ずしも読まれぬことがまたそれぞれの箇所に記されてゐる。

すなはち第一字頭では si に西を当て、

此 si 字在聯字中間下辺俱念詩在嚙字首念詩西俱可单用仍念西。

と記してゐる。詩は ši に当てた漢字である。第三字頭では sir に対して、

此 sir 字。在聯字首。念詩尔西尔俱可。单用仍念西尔。

と記し、第四字頭では sin に心を当て、

此 sin 字。在聯字中間下辺俱念身。在聯字首。念身心俱可。单用仍念心。

と記してゐる。身は sen に当てた漢字である。第五字頭では sing に星を当て、

此 sing 字。在聯字中間下辺俱念生。在聯字首。念生星俱可。单用仍念星。

と記してゐる。生は seng に当てた漢字である。第六字頭では sik に対して、

此 sik 字。在聯字首。念詩珂西珂俱可。单用仍念西珂。

と記し、第七字頭では sis に対して、

此 sis 字。在聯字首。念詩思西思俱可。单用仍念西思。

と記し、第八字頭では sit に対して、

此 sit 字。在聯字首念詩呾西呾俱可。单用仍念西呾。

と記し、第九字頭では sib に対して、

此 sib 字。在聯字首。念詩鋪西鋪俱可。单用仍念西鋪。

と記し、第十一字頭では sil に対して、

此 sil 字。在聯字首。念詩攔西攔俱可单用仍念西攔。

と記し、第十二字頭では sim に対して、

此 sim 字。在聯字首。念詩模西模俱可。单用仍念西模。

と記してゐる。第十字頭の sio に対してはこの付記がないことは注意せねばならない。

これを要約すると、つぎのようになる。(一)は聯字の中の場合である。(二)は聯字の頭の場合である。(三)は単字の場合である。

	(一)	(二)	(三)
si	詩	詩 または 西	西
sin	身	身 または 心	心
sing	生	生 または 星	星
sib		詩鋪または西鋪	西鋪
sit		詩呾または西呾	西呾
sik		詩珂または西珂	西珂
sim		詩模または西模	西模
sir		詩尔または西尔	西尔

sil	詩擲または西擲	西擲
sis	詩思または西思	西思

si, sin, sing 以外の聯字中の場合については記されてゐない。西, 心, 星及び詩, 身, 生は本稿で *ši, šin, šin* 及び *ši, šen, šen* と転写する漢字である。すなはち si, sin, sing は聯字の中では *ši, šen, šen* であり, 聯字の頭では *ši, šen, šen* であることもあるのである。その場合 *ši, šen, šeng* と同音であるのである。この場合 *šen, šen* であつて *šin, šin* でないのは, 十二字頭にこれに相当する単字がないから, つまりこれらの音節がないからか, 或は実際には *šin, šin* であるがシナ語にそれに相当する音節がないのでそれに近い音で表したことによるのかは, 本書からは知ることができない。また si, sin, sing 以外の si をふくむ単字のその s は聯字の頭において *š* であることもある。このときは *š* と同音である。

異施清字の条のつぎの形もこの事実を示すものである。

44ウ	-si-, -si	詩	ši
"	-sin-, -sin	身	šen
46ウ	si-	詩	ši
"	sin-	身	šen

清語易言にはつぎの様に記してある。

si (西) を, ši (師) と言ひ, また ži (日) と言ひ, また šu (書) と言ふ,  
sin (心) を, šen (深) と言ふ,  
sing (興) を, šeng (陞) と言ふ,

ži は ši の有声音を示したものであらう (§ 18 参照)。šu はさらに母音が異つてゐる (§ 31 参照)。

欽定清漢対音字式の第一字頭, 第四字頭, 第五字頭にはつぎの様に記してある。

si 西。𦉳。錫。席。習。𦉳字以下。俱平声読。語気内応読作什字者。仍以什字对音。  
sin 新。信。信字。平声読。語気内応読作申字者。仍以申字对音。  
sing 星語気内応読作陞字者。仍以陞字对音。

什申陞はそれぞれこの書において *ši, šen, šeng* に当てた漢字であり, 上述の事実を記したものである。

アミオの満洲鞑靼語文法には,

(前略) *ʃt* (訳註 si に等しい。) の音節は語中及び語末においてほとんどいつも, われわれが *chemin, cheval* 等の諸単語において *che* を発音する如く発音される。たとへば *ouméʃt* と書かれて *oumeche* と発音される。

とある。

ガーベレンツはつぎの様に記してゐる。

i の前の s はしばしば j の如く発音される。たとへば *ousikha* は *oujikha* と発音せよ。(以下略)<sup>(51)</sup>

有声音であることが注意される。アルレも si は ji (仏, zhi) であると記してゐる<sup>(52)</sup> アダムは s は母音 i の前で sh となると記してゐる<sup>(53)</sup>

ザハーロフの記述は非常に精しい。すなはち,

子音 c s は ca, cə, co, cy (sa, se, so, su) の諸音節においてはロシア語の c (s) の様に発音される。しかし母音 и (i) との結合の際は一様でなく си (si) と ши (shi) とに発音される。すなはち 1) 語頭においては大抵, 特に単語内に (訳註 *въ словѣ* とあるが *въ слогѣ* の誤か。) 半音節の рѣ, нѣ, кѣ, тѣ, лѣ (r, ng, k, t, l) がある場合には, си (si) と発音される。たとへば, *sibe* сибо, *sijigiyan* сицигянь, *sibi-*



ya сибя, siri сири, siran сирань, sirha сирха, sirkedembi сиркэдэмби, singgeri сингэри; sikse сиксэ, sithen ситхэнь, silhi силхи。しかし他の半音節 нь, мь, сь (n, m, s) があるときは, 多くは си (si) と発音され, 例 sin синь, sindubi синьдуби, sishe сисхэ, simbe симбо, またときには ши (shi) と発音される, 例 sindambī шиньдамби (だが北方シナ語方言には шинь (shin) といふ語がないから, 北京の満洲人によつて шэньдамби (shendambi) と発音される), simhun шимхунь。口) しかし語中及び語尾においてはほとんどいつも, 特にこの音節が人の職業, 身分等を示すために名詞に付加される役をするときには, ши (shi) と発音されると言へる, 例 faksi факси, mucesi мучэши, sisiri сишири, sisikū сишику, dosika дошика<sup>(54)</sup> 註一 しかし一般に si を си (si) 或は ши (shi) と発音することに対して厳密なそして一定した法則を設けることはできず, 正しい発音はただ実地によつてのみ決定される<sup>(55)</sup>

上述の十二字頭の条で聯字の頭において sí, sī の二形が現れると記された点が, ここではさらに各音節について詳しく述べられてゐる。sindambi が шиньдамби と発音され, シナ化した北京の満洲人によつては шэньдамби と発音されるという点は注意される。ただし特に ши と発音されるといふ場合の faksi の si が си であるのは誤字であらう。かれは別にその si を ши と記してゐるのがみられる<sup>(56)</sup>

かれの満露辞典には, さらに語頭に si をもつ各単語についてその си, ши (ここでは ċи と記す) を区別して記してゐる。

異施清字の条には語頭に si をもつ語例につぎの語がある。

46オ sisingga 詩生啊      šišēŋa 無茶食ひ

四十六丁表にあるから, つねにこの様な音をもつとしてゐるのである。この語の語頭の si は, ザハーロフの辞典では ċи であるから一致しない。

ルードニェフの調査の口語では, 語頭の場合の例として,

сі ты (お前)      文語形 si  
сіңрі крыса (家鼠)      "      singgeri

がある。ザハーロフの辞典でもいづれも си であり, 一致してゐる。語中の場合の例には,

аїшілэ- помогать (助ける)      文語形 aisila-  
кужі ножикъ (小刀), ножъ (庖丁)      "      huwesi

があるが, なほ後者には кúже の形もある。(アミオの上掲の記述が関連して考へられる。)

しかし僅かこれだけの例からではこの口語のこの点を充分に知ることはできない。

服部先生の調査された口語にはこの点に関してつぎの一例がある。

gòsin 三十      文語形 gūsin

この口語には, 音読の際 [sí] のほかに [jì] が現れてゐる。この [jì] がこの場合現れない点は注意せねばならぬ。

以上種々の資料をみて来たが, この事実が歴史的にどういふ経過をもつたものかはまだあきらかでない。文語において si の単字が外国語から入つた語を写す場合以外にほとんどみられないことも注意すべきである。

なほ異施清字の条の一語を付記する。

52オ amsun 阿模尊      amujun 神の供物

両語形の間どんな変化があつたかはいまだあきらかでない。